

山一平井春嶺 (第三部) 送別一平井千手の前...

京都琵琶協会八月例会

筑前琵琶演奏会

八月二十日(日)正午京都東山安井金比羅會館...

藤巻旭鴻演奏会

八月二十七日(日)正午東京日本橋証券ホール...

数氏並に琴、笛、ヴァイオリン各一人、舞踊...

ラジオ・テレビで琵琶放送

七月二十一日(金)午後三時十分NHK・FM...

予告

京都琵琶協会九月例会 九月三日(日)昼二...

琵琶 京 紘 第二九一号 京 紘 社

戦国時代の女性 (六)



清盛の妻、時子と 頼朝の妻、政子 (1) 平家の棟梁清盛は、その一代に平氏の黄金時代を築いて「平家にあらずんば人にあらず」とまでいわせる一時期を招来した。

清盛の妻、時子は左大臣を贈られた平時信の娘である。結婚したとき、清盛は既に長子重盛、次男基盛の二子があつた。彼等の母は右近将監高階基章の娘であつた。

に帆をあげた出世ぶりであつた。安芸守となつた後、保元の乱後、その運勢は飛躍的に展けていく。播磨守となつた清盛は同じく保元の乱鎮定に大功のあつた源義朝の左馬守とは段違ひの恩賞である。播磨は最上位の大国であり、瀬戸の海に添う地方で海産物も豊かなうえに、海運交易の多い一等国であつた。

夫がこのような順風に乗りた出世ぶりのあつたに、時子は、宗盛、知盛、重衡以下の数人の子供を生んでいる。まさに満ち足りた妻の栄光に輝いていた時代である。その中に後の建礼門院徳子もいる。

はもはや全く平家のものになった。

源氏は中央から全く排除されてしまい、藤原氏ほか公卿衆たちは武士の保護をなしには、何事もなし得ない無気力を存在にたつた。

しかし、時子にとって困難な後半生はこの平治の乱後にはじまる。清盛はなかなかの美丈夫であつた。性格はさっぱりとしていて陰湿なところはなく、激し易く、こうと思つたことは必ずやり遂げる。一口に云えば男らしい情熱家で、寛やかな心持ちの人間であつたと思われ。何よりも彼は美しいもの豪華なものが好きであつた。女の美しさ、可憐さには弱かつた。

男の魅力の一つに充分なり得るこの性格も、時子にとっては長所としてばかり見過ごすことは出来ないものであつた。時子は夫がよその女に生ませた子供を三人も引き取って養育し、立派に成人させている。

左大臣藤原兼雅の夫人や、准三后の位に進んだ白川殿と呼ばれる盛子、大納言藤原隆房夫人、関白藤原基通の北の政所となつた女性もまたそうである。

清盛は藤原氏を見習つてその女子を宮中に入れ、女御、中宮となし、その腹から生まれた皇子を即位させて外戚となることを最上の目的とするようになる。時子は夫のこの理念を勿論知つてはいたであろうが、夫がよその女に生ませた娘たちを引取つて育てた心持ちは複雑なものがあつたであろう。

(此項未完)



大阪夏の陣(二)

山川流水

後藤又兵衛が大阪夏の陣に影武者を立てて、本人は河内の戦場から離脱したという「大阪軍記」の記事の真相は？

大分県耶馬溪町の山深いところに、後藤基次・俗名又兵衛」と記した墓標がある。碑名によると、承応三年(一六五四)正月二十九日夜、自殺したとある。この墓について「大日本史料」は、土地の古老の話として、元和元年(一六一五)大阪落城の後、又兵衛は若い頃親しかつた女のもとへ逃れて来た。村童に手習いなどを教えていたが、秀頼が死んだという知らせを受け、生き甲斐がなくなつたと嘆いて自殺したという説を記している。秀頼の鹿兒島入り説とからめると、尤もということにもなるが、これを計算すると又兵衛は九十余才の長寿を保つたことになる。いま現地の郷土史家は、別人の中津藩士の墓碑と解釈しているようである。

「大日本史料」は、このほか文献記録を並べて大阪落城後、色々な風評が流れていたことを伝えている。

又兵衛は岡山に隠れたが、その後病氣静養のため京都で医者にかかるうち、京都所司代

に毒殺されたという説がある一方では、戦傷療養に道後温泉で湯治していた。これを知つた地元若者たちが、裸の又兵衛を大勢で襲つて首をとり、恩賞にあづかるかと幕府に送つたところ、又兵衛は河内で討死にしているのに何を今更。と取り上げてくれない。地元では名ある勇士に済まぬことをしたと、懇ろに霊を祭つて冥福を祈つたともいふ。

後藤又兵衛について巷間伝えられる諸説は兎も角、われらは飽くまで「豪傑又兵衛」として、河内の激戦で壮烈な最期を遂げたものと信じてたい。

又兵衛が平野で出陣を待機していると、本多佐渡守の親類で京都相国寺の僧楊西堂が家康の使者として来訪し「又兵衛の出身地、播州を領地として与えるから手を引いてほしい」といふ。又兵衛は「関東方が弱いならば徳川の味方になつてもよいが、落城を前にして大阪方を見捨てる訳にはいかぬ」と断わり「私の実力を高く評価して貰つて光栄である。百日は支えられる大阪城も、自分が死ねば一日でカタがつくだろう。折角の厚意に対する謝礼の意味で、自分は開戦すれば一番に戦死してあげよう」と返事した。

戦後、草の根をわけて豊臣方の残党を探し、その子孫の絶滅を図つた家康であつたが、又兵衛子孫の記録は「大日本史料」にも多く残され、また、又兵衛の家系を名乗る家が各地に現存し、何れも先祖又兵衛の命日を五月六日として、夏の陣での戦死を確認している。

又兵衛の長男左門は、元和年間に自殺したというが、この家系が兵庫東加西市の後藤一平氏と云い、又兵衛愛用の袴、槍などを保存しているが、又兵衛の墓や位牌等はない。

三男正方は、中村角兵衛と名乗つて淡輪村(大阪府岬町)に隠れているうち、素性を幕府に密告する者があつたが、お構いなしとのことで後藤に復讐、その子正利は豪傑又兵衛の家名を惜しむ丹波篠山藩の青山因幡守宗俊が身柄を預かり、その長男基英を新規百石で正式に家臣とし、次男利政は知行百石で同家臣駒沢加左衛門の養子となつた。

いま、兵庫東篠山町の日蓮宗妙徳寺には「後藤又兵衛基次六代目の孫から十一代目の孫」の後藤家墓石が並んでいるが、五代までは近在の寺(鹿寺)に葬られたという。十一代の後藤格三郎が昭和九年神戸で死亡して篠山後藤は絶家、系図等は駒沢家で保管されている。

我が道を行

六十五年(六一)

西郷 天 風



あの頃の関西は、大正時代から児玉天南翁をはじめ、東郷重厚先生、永井重輝名人等々斯界最高の権威名家が、鹿兒島から陸統と上洛され、ために「京・阪・神」がさながら薩摩琵琶の本場然たる有様で、未だ見たことも

ない「正派月報」なる専門誌に恐れをなして居る青二才の私だつた。故に、初手台せに預つた諸先輩のお名前もさだかならず、ただ、平木天囚、栗本天芳の両師のみ、今なお記憶に新たなる次第で、若しその当時の様子御承知の師あらば、この機会に御教示を乞ひ次第である。

さて広島では四月初め、白鳥ヶ浜海軍俱樂部に入り、五日の正午頃、野球場にて場内アナウンスによる「林銃十郎内閣瓦解」の報に驚いた天井村塾の一同協議の末、お家の大事として急拠帰京、講習会は中止となつた。

この時、私の脳裡にひらめいたことは、このまま台湾へ行く決意だつた。何か知らん、台湾に大分近い処まで来ている気持ちだつたからである。

かくて、天井村塾の一行と別れたその夜は、ステイブル・ファイバーの会社に勤めている友人方の一泊、翌日は門司港の旅館に一泊して七日の朝、台湾へ向け高砂丸の客となった。思えば、明治二十三年四月八日生れの私は、四十八年目の誕生日を高砂丸の船上で迎え、九日の真昼頃、台湾の基隆港に入港した。

さて、目ばゆかつた。大体私は、本土を離れて税関の検問を受けるような遠い所へ来たのはこれが始めてであつた。更に、新聞社員のインタービューなどは、夢にも見たことがなかつたものを、この時ばかりは、台湾日日新聞や高雄新報等の記者に取り囲まれて面喰つた事など、生涯忘れ得ぬ思い出の一つである。

この台湾には、私より五才ばかり年上の従弟が、政経新報という新聞社の編集長をしていたが、それらの肝煎りでひとかどの名士扱いを受けたのであろう。船から降りて棧橋を渡っていると、この従弟伊藤猛三郎が盛んに手を振っているのを発見し、その案内で台北の日の丸旅館に投宿したが、此処でも高級旅館の一等客扱いなるものを経験し、ここで五ヶ月余の滞在客となつて、大名気分を味つたものだつた。

与えられた部屋は二階の八畳に四畳の次ぎの間付きで、そこには内線電話器が備えつけてあり、何事もこの電話器の御厄介になるようになつており、毎日々々が一銭もいらぬばかりか、五ヶ月の間、一度も宿泊料の請求も諸雑費の立替金も請求されることがなかつた。八畳の間の廊下には、応接セットが洋館の応接室然と備えてあり、中庭に植込んであるシュロの木やピンロージ、ヤシの木、鳳凰樹などの頭部に当る部分の裡側が互いに交錯して、強烈な日光をさえぎつて見えるのも涼味をただよわせ、何となく爽快な気が漲つてい

る。更に梢の間から光沢鮮やかな陶器瓦の屋根に、色彩豊かな美しい廟も近く、龍の胴体がチラホラ見えかくれて、豪華な支那風景の中にひたつた感じが深い。

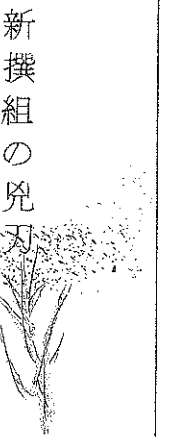
さて、渡台第一の用件は、大日本生産党に連絡をとり、滞在中の便宜を謀ることと、総督府の学務部長森岡二郎氏を訪問することであった。

生産党では、先づ第一に運輸局の泊局長に、私の台湾に於ける用務を説明し、ついでに島内の主要駅の職員家族慰安琵琶演奏に出席することを約し、向う一ヶ月間の汽車二等バス二枚が交附された。

私一人に二枚のバス下附とは如何、を問えば、この二等バスを受けるほどの人には、必ず随行者が居るものと決めてあるのだった。また、台湾総督府学務部長森岡二郎氏は、かつて水戸の大日本琵琶国風会時代に、茨城県内務部長の要職にあって、琵琶界のため協力を惜しまなかつた有力者で、この時も、各中等学校長宛て紹介状に添えて、激励の言葉が嬉しかった。

台湾には、かつて小田原國尊氏が永らく滞在して斯道開発に実績をあげ、続いて浜田天南、そのあとへ西郷天風、と云う状態で、島内の斯の道に対する理解もたかく、至る所の歓迎ぶりは想像に絶するものがあった。中でも、二泊続きの絃歌の舞や、二十余人による台南奥地の野猪狩りなど、二度と得難き貴重な体験であった。

(訂正) 一七月号本文の三ページ十八行目「浜田天南」は「養の誤り」でした。



新撰組の兇刃
内山彦次郎の暗殺

辻 旭城

幕末、元治元年(一八六四)五月二十日夜、大阪西町奉行の筆頭与力内山彦次郎は、諸御用調役・勘定役・唐物取締役を兼ね、多忙を極めていた。夜も更けた十時過ぎ、役所から帰宅すべく、籠わきに護衛の刺客一人を従えて天神橋のたもとに差ししかかった。

新撰組にとって邪魔者である内山彦次郎を斬るべく、大阪出身の山崎蒸がその行動を調べ上げてこれを知った。そして局長近藤勇は、土方歳三、沖田総司、原田左之助、永倉新八、井上源三郎、島田魁など、何れも幹部腕利きの者たちを引連れて大阪に下った。

定紋のついた提灯の明かりが天神橋近くに差しかかると、剣豪沖田総司と原田左之助が左側から、永倉新八と井上源三郎が右側から飛び出して、沖田が素早く籠の外から内山を突き刺した。深手の内山を籠から引き出して、初太刀を土方歳三が、そして首を切ったのは局長の近藤勇だったという。

暗殺の後内山の首をさらしものにしてしようと用意して来たが、折から人の来る気配がしたので、「此者悪人にして、灯油を多量に買占

め、諸臣を困窮せしむるによって、天下の義士これを誅するものなり。」と木の捨札に書いて死体に立てかけ、一同はその場をくらませてしまった。

内山暗殺の原因について山崎の記述によると「与力内山彦次郎は、幕史でありながら敵方の勤皇党に味方し、長州藩の先手となって幕府の信望を失わせるために、奸商と結託して米価の釣上げに奔走したほか、灯油を買占めて値段をせり上げ賄賂を取ったとか、箱館物産会所に関係して歩金をくすねた。」これらのことを山崎蒸が探知してきたので、不屈至極として天誅を加えたといわれる。

与力内山は天保八年(一八三七)大塩平八郎の乱で、その鎮圧のために活躍し、平八郎

残暑御見舞申上げます

錦心流琵琶輝派
輝水会本部
会主 輝 錦 凌

外会員一同

〒118 東京都文京区本郷五丁目二二一三番
電話 〇三(八一)七五七四番

父子が敗れて、命からがら油掛町の美吉屋五郎兵衛宅に逃げのび潜伏しているのを、苦心を重ねて探知し、捕手多数をつれて捕縛に向い、遂に大塩父子を縛にした。

に云うと、その幕閣を構成する為政者たちであった。そして、そうした政治の進行のなかで把握とも思われたものが、次々に現実の姿をとって現われてくるのである。

この天保の乱もようやく治まり、その功績によって銀二十枚と賞詞を貰った。幕府には忠実、有能な与力として、歴代の町奉行の信頼を受けていた。

政治に大きな転換が要求された。もちろん、時の為政者たちは現状の維持に汲々としていた。このとき、わが国を植民地化の危機から守り、三百年の封建制度をも同時に脱却するという大事業をやったのは、坂本竜馬をはじめ吉田松陰、西郷隆盛、高杉晋作、勝海舟たちである。

坂本竜馬



一土佐人としての龍馬
奈良本 辰也

明治維新は、わが国の長い歴史の上でも最も大きな変革であった。このとき、人々の心のなかには阿片戦争に触発された植民地化の危機感があった。二百五十年の泰平によってすっかり眠り込んでいたナショナリズムが、この隣国の状態を見て頭をもたげてきたのである。

このナショナリズムを充分に把握すること出来なかつたのが徳川幕府であった。さら

現在も価値観の転換が叫ばれ、政治の革新が求められている。そして人々は、それに向って何事かを考えざるを得ない時期に到達していると思う。まさに、幕末的な状況ではなからうか。いや、そう云って適当でないならば、大波乱をふくんだ時代の様相があるといってもよい。

人々が、幕末ものに関心を持つ理由はそうしたところにある。人々は意識するとなにかかわらず、こうした人物の行跡をたどることによって、乱世の政治学を知ろうとしているのではあるまいか。

ところで、坂本竜馬という人物であるが、私はこの人のいかにも南国の人らしい明るさとロマンチズムを感じる。同じように一匹狼的存在であった出羽の清川八郎や、越後の本間精一郎などと違うのである。それにひとく知的で、現代的にも通用する計画性の持ち主であるようにも思う。

残暑御見舞申上げます

ものがたり琵琶
雅俊 杉山 旗水
〒177 東京都練馬区石神井台四ノ五
電話 〇三(九二八)四〇一三番

雅俊会推薦新鋭競演の会

九月八日(金)午後二時 東京上野 本牧亭

次雅	阿久津彩水	荒井姿水
代俊	柴野道水	二反田岳水
荷会	都野穆鳳	廣瀬圭水
希俊	岩崎龍風	輝宮錦統
望推	大場穂苑	若宮旭登
星薦	大関英子	輝宮錦統
	原田曲水	都錦穂

ものがたり琵琶
安寿と厨子王
(下)(上) 浅野晴風 杉山雅俊

さて今、一匹狼という言葉を使ったが、この一匹狼は、それが一匹狼ということからくるマイナス面も竜馬はよく知っていたようだが、彼が幕臣勝海舟の塾に入って一心不乱に学んだのも、あるいは後藤象二郎と組むようになったのも、その一匹狼としての弱さを克服する手段であつたらう。彼にして、薩摩や長州に生まれていたらどうなつたであろうか。

竜馬は、西郷吉之助や桂小五郎がうらやましかつたに相違ない。何と云つても彼等は大陸の武士である。その実力で天下に相対することが出来るのだ。彼等の発言には万鈞の重さがある。薩・長連合の推進者であつた竜馬には、それが痛いほどよく分かつた。

「私一人にて五百人や七百人の人を引て、天下の御為するより二十四万石を引て、天下国家の御為致すが甚よろしく……」慶応三年六月二十四日の「乙女、ややべあて」書簡に書いてある通りである。

そうした彼が、薩・長との関係ではなくて実際に土佐藩二十四万石を背景に、山内容堂と後藤象二郎を動かして打った大芝居があの大政奉還であつた。すでに討幕の密勅は下つてゐる。武力衝突となれば日本国は真二つに割れて相戦うであろう。ヨーロッパの烈強が虎視眈眈と睨をねらつてゐるその内での戦争は避けねばならぬ。と、同時にその戦いのあとにける薩・長の政治は、これまでの幕府より更にきびしいものがあるだろう。そうならば土佐はどどうなる……。

琵琶楽器の研究所開設

鈴木流泉

今般琵琶(各流・各種)楽器の研究室が私の生地浅草駒形(台東区駒形一ノノ五スズセイビル・電話〇三―八四五一―二二八番)に出来上りました。私の本名鈴木誠治の略称スズセイを以て社号とする「目玉のスズセイ」(世界各国の子供たちに喜ばれている玩具の眼球製造販売専業)本社ビル最上階六階がその研究室になって居ります(第二・第四土曜日正午より六時まで)。

今日まで長期間、筑前・薩摩のほかに音楽大学、宮内庁楽部等の古代楽器の修理も手掛けて参りました。その多くの経験を茲に活かして皆様の御相談に応じたく存じます。皆様各自手づから楽器が修理できるようになればこの研究室の目的が叶えられたと申せませう。どうぞ御遠慮なく御利用ください。なお遠隔地の方は通信による回答も致します。更に日曜日が宜しい方は事前に電話連絡の上越ヶ谷研究所(埼玉県越谷市大成町一ノ二二九二・電話〇四八九一八二―二四四一―番代)の方へお出でください。(日本琵琶振興会々長)

京都琵琶協会の八坂神社琵琶奉納

七月二十三日(日)は還幸祭の前日、境内はさすがに静かで、午後の日差しを避けて、お社や木陰で憩う人たちが見受けられた。

私は能楽殿の東にある社務所の大広間におちついた。冷房のよく利いた畳の部屋である。「琵琶控室」と入口に貼紙をピンで止めた。能楽殿へは広い廊下依りになつてゐる。まず会員たちと屏風、敷物、番組と準備にとりかかった。

四時半、本殿に正座す。荘厳の中にお敬いを受け、平井会長の玉串奉奠と共に一同揃つて拍手を打ち拝礼す。

出演の抽せんも済んで琵琶のムードは盛り上がった。新調のマイクは木下君が操作し、音響は確かめられた。

控室には伊吹、荒木、矢吹、田中、峰口氏らの応援もあつて賑わつた。

五時、会長開会の挨拶には七、八十名の聴衆が大テントの下、すでに腰掛に席を占めて開会を待っている。

琵琶の音がマイクを通して境内に響きわたる。参拝の人々も足をとどめて妙音に聴き入るようであつた。

さわやかな夜風が吹き、拝殿、能楽殿には数多いつり提灯が輝くころ、一そう祭礼の気分が漂うて来る。

宮司さんは社務所に端座してじつと演奏を

聴いて居られ、演奏はいずれも美しく、正しく、真剣味であつた。

かくて来聴者たちを楽しませ、感動を与えた演奏は三時間近くも巨たり滞りなく終了す。一同は例年の行事である献奏への有難さを身に感じ、琵琶発展を希つて散会した。

- 曲目と献奏者氏名
1. 大高源吾―渡辺旭寿
 2. 本能寺―高田旭章
 3. 堅田落―岡本旭村
 4. 常陸丸―山岡旭清
 5. 屋島の誉―牧 南水
 6. 小栗栖―桜井旭富
 7. 別れの傘―安住旭康
 8. 新撰組―梅原旭濤
 9. 川中島―馬場鴨水
 10. 山下木下皇水
 11. 時は今也―平井春嶺

鴨水記

千百年の伝統を誇る日本三大祭の随一京都祇園祭は、本祭りの十七日には二十九基の山鉾が市の中央を巡幸して猛暑の旧都を湧きたたせ数千万の見物客で賑わうが、京都琵琶協会は昭和三十年の後の祭りのこの日に第一回の献奏会を行つて以来、毎年欠かさず同日八坂神社で奉納演奏会を挙行し、今や京名物の一つとして人口に膾炙されてゐる。一係―

京都伏見長建寺夏祭り

七月二十一、二両日大阪琵琶同好会奉納会、神崎与五郎―光旭仙―湖水渡り―作花旭友―安宅の関―辻旭城―平重盛―石橋旭嶺―二〇三高地―中島旭徳―伽羅の兜―天津八千代。

大阪安井神社天神祭

七月二十五日(火)朝十時大阪琵琶同好会奉納会。菅公―石橋旭嶺―本能寺―辻旭城―那須与市―矢野旭信―真田幸村―作花旭友―河内の宿―島津―吉野懐古―米原―白虎隊―木村蓮水―川中島―田中歎水―湖水渡り―中山風水―岸壁の母―天津八千代。外に詩吟五題。

柏会・旭登会合同月例会

七月三十日(日)屋東京文京区大塚の貸席京屋で日本芸術琵琶柏会・筑前琵琶旭登会合同で開催。門琵琶外弾法―錦幽―夢―山崎錦幽―忠度―坂入俊風―若き敦盛―長岡旭玲―桶狭間―青木草水―滝口入道―錦幽―高松城―高田菜水―衣川―若宮旭登―城山―杉山旗水。以上研修を終り六時半散会。

東西合同夏季一泊弾交會

七月三十日、三十一(日)両日浜松市西遠荘、薩摩琵琶四明会・同正絃会・同鶴絃会共催。一泊弾交會は二十数年前京阪神の薩摩正派の弾奏家達が比叡山四明嶽に会して一泊会を催してから「薩摩琵琶四明会」の会名が出来たと聞いているが、爾来毎年一回関西の何処かで開催されていたところ、東京正絃会員も漸次これに参加し東西の中間に位置する浜松附近で開催するのが便利という意見が出て、十一年前始めて遠州奥山の方広寺で開いたが、距離的には勿論、都廳を離れたこの奥山が人氣を博し、それ以来遠州、三河で数回行われ、

今年には浜松市郊外佐鳴湖東岸の小高い丘の上の県立保養所西遠荘に決定した。両日とも好天に恵まれ見晴らしのよい五十六畳敷の大広間で、舞台右側に「四絃一声響たばしる木魂かな」の縦幕、左側にはめぐりが用意され、定刻十時半開会の挨拶に続いて第一部十二曲、第二部十四曲が終り第一日終演、引き続き懇親の宴に移り一同胸襟を開いて語り合ひ、隠し芸なども続出して楽しい一夜を過ごした。

年二日は六時半起床、湖畔の散策や入浴などの後朝食、九時から第三部の演奏が開始され、全十二曲が終つたのが正午で食事を共にして散会したが、遠く青森県や九州の会員も参加され、年齢的には小学校六年の女児から九十才の媼まで約五十名の競演で、特に最長老の岡部錦蝶女史は難曲の「奇縁」を、令嬢が後ろから琵琶の海老尾を支えられての熱演で列席者一同感激して目頭を熱くした。

(第一部) 吉野の奥―大場―木枯し―川口―於那の峰―河西、詩吟―村松―少年白虎隊―小野―重衡―松永―小松の操(二)―松木―酒―青島鶴瑛―石重丸―小林錦濤―桶狭間―森鶴翁―菅公―水谷浩水―吉野落(下)―岡尾鶴城(第二部) 浜名湖八景―芥川外六人―金剛石―川村、山田―白虎隊―高林―錦の御旗―山本鎮舟―霧の川中島―神藤叔水―虞美人草―大石鶴伶―彰義隊墳墓の歌―佐藤湘春―五条橋―三上鶴浄―河内の宿―伊勢谷安江―瀧陽江(上)―八束一峰―乞食瓢六―最上穂洲―六号潜水艇―橋谷岳陽―鉢の木―若林鶴山―城